東京都江戸東京博物館紀要　第8号　2018年3月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 8, pp. 51－69, March, 2018

薩摩藩士仙波市左衛門の対幕府交渉と篤姫の動向
―江戸東京博物館所蔵「薩摩藩士仙波家文書」の紹介―

畑　尚子*

目次

はじめに
一、仙波家の家系
二、篤姫とさか
三、江戸での生活と市左衛門の役目
（1）島津家の姻戚関係と市左衛門の交流
（2）活発に動く女性たち
（3）大奥向の調整と小の島
（4）斉興の三位昇進
おわりに

キーワード　薩摩藩　仙波市左衛門　さか　篤姫（天璋院）
島津斉宣　島津斉興　島津斉彬

はじめに

本稿は、平成二十八年度に新規収蔵した「薩摩藩士仙波家文書」の概要と記載内容を紹介するものである。史料は全八冊で、横半帳の形態である。下段表に資料番号・資料名・時代年代をまとめた。以下No.で表記する。

No.	資料番号	資　料　名	時代年代
①	16200087	道中日記（仙波市左衛門日記）	嘉永3年（1850）4月28日～6月6日
②	16200088	浦の藻屑（仙波市左衛門日記）	嘉永6年（1853）正月～12月晦日
③	16200089	浦の藻屑（仙波市左衛門日記）	安政3年（1856）正月～11月18日
④	16200090	道中日記（仙波市左衛門日記）	安政3年11月18日～安政4年（1857）正月13日
⑤	16200091	浦の藻屑（仙波市左衛門日記）	安政4年（1857）正月13日～12月晦日
⑥	16200092	道中日記（仙波市左衛門日記）	文久2年（1862）2月1日～2月22日
⑦	16200093	仙波家家系其外諸書留	文政2年（1820）閏4月12日
⑧	16200094	明細書覚	明治6年（1873）

①～⑥⑧は三代仙波市左衛門が記したもので、⑦は初代仙波市左衛門の手跡とよるといえる。仙波氏は生粋の薩摩藩士ではないが、八代薩摩藩主島津重豪以降、斉宣、斉興、斉彬と歴代の藩主に重用された。

①～⑥は道中記三冊、日記三冊で、日記は年代が飛んでいるが、本来は毎年執筆していたと勘案できる。

一、仙波家の家系

先ずは⑦⑧より、仙波家の家系について辿っていくこととする。

文化三年（一八〇六）三月四日邸宅が焼失する火災で、家系図やその他の書留も燃えてしまったため判然としないが、往古は武州入間郡仙波に居住する郷士であったといわれる。市左衛門永春は放鷹の妙手であったので江戸に

*東京都江戸東京博物館学芸員

出て、御三卿清水家に仕えた。

初代　永春の息子市左衛門永昌は天明四年（一七八四）三月六日、四十八歳で島津家に召抱えられる。永昌を薩摩藩士としての仙波家初代とする（系図）。永昌が清水家を致仕した理由として、「無處訳合有之御名前出し不申候」とあることから、誰かと揉め事があったようだが詳細は不明である。この時二十四歳の嫡子市十郎も連れて奉公する。

永昌は召し抱えられた日に永代大番入を仰せつけられ、鷹匠と書役を兼務し、三人賄料役料米二五俵となる。同年八月二十八日に藩主重豪に初御目見をはたす。寛政十二年（一八〇〇）七月一日、広敷番之頭となり、一代新番入、役料米も四八俵に増える。文化三年十一月五日隠居（重豪）付となる。文政二年（一八一九）四月十八日首尾よく数一〇年勤めた褒美として銀五枚を拝領し、隠居する。

二代　市十郎永膳（のち永盛）は父と一緒に召し抱えられ、天明五年（一七八五）閏十月二十六日鷹匠見習となり、役料米一八俵三人賄料役を受ける。天明六年十一月二十八日藩主重豪に初御目見をはたす。寛政七年（一七九五）四月十八日鷹匠、文化十年正月十一日鷹匠世話役、同十二年十月鷹匠頭・役料米三五俵、同十三年九月一代新番入。文政二年四月二十一日、大隠居（重豪）付、広敷番之頭、鷹匠頭兼務、役料米四三俵となり、同年閏四月十二日家督相続。同七年病気により御役御免を願い認められる。

初代息子　後に市十郎と名乗るこの人物は甥である三代市左衛門より年下である。初名宇吉。文政十二年（一八二九）正月十五歳で初御目見、同十三年八月若殿（斉彬）付奥小姓となり芝屋敷へ出仕。天保三年（一八三四）七月小弥吉と改名、翌年二月表小姓となる。同十四年二月市十郎と改名。同十五年六月留守居役勤、嘉永七年（一八五四）四月御供目付格となる。江戸定府で、市左衛門が鹿児島に行った時も江戸にいる。

二代嫡男　市十郎長男民司（永常）は寛政十一年（一七九九）十歳で若殿（斉興）の小姓、文化三年十月二八日同付奥小姓となる。同四年正月十五日に藩主斉宣に初御目見をはたすも、同六年五月七日に家出（欠落）する。

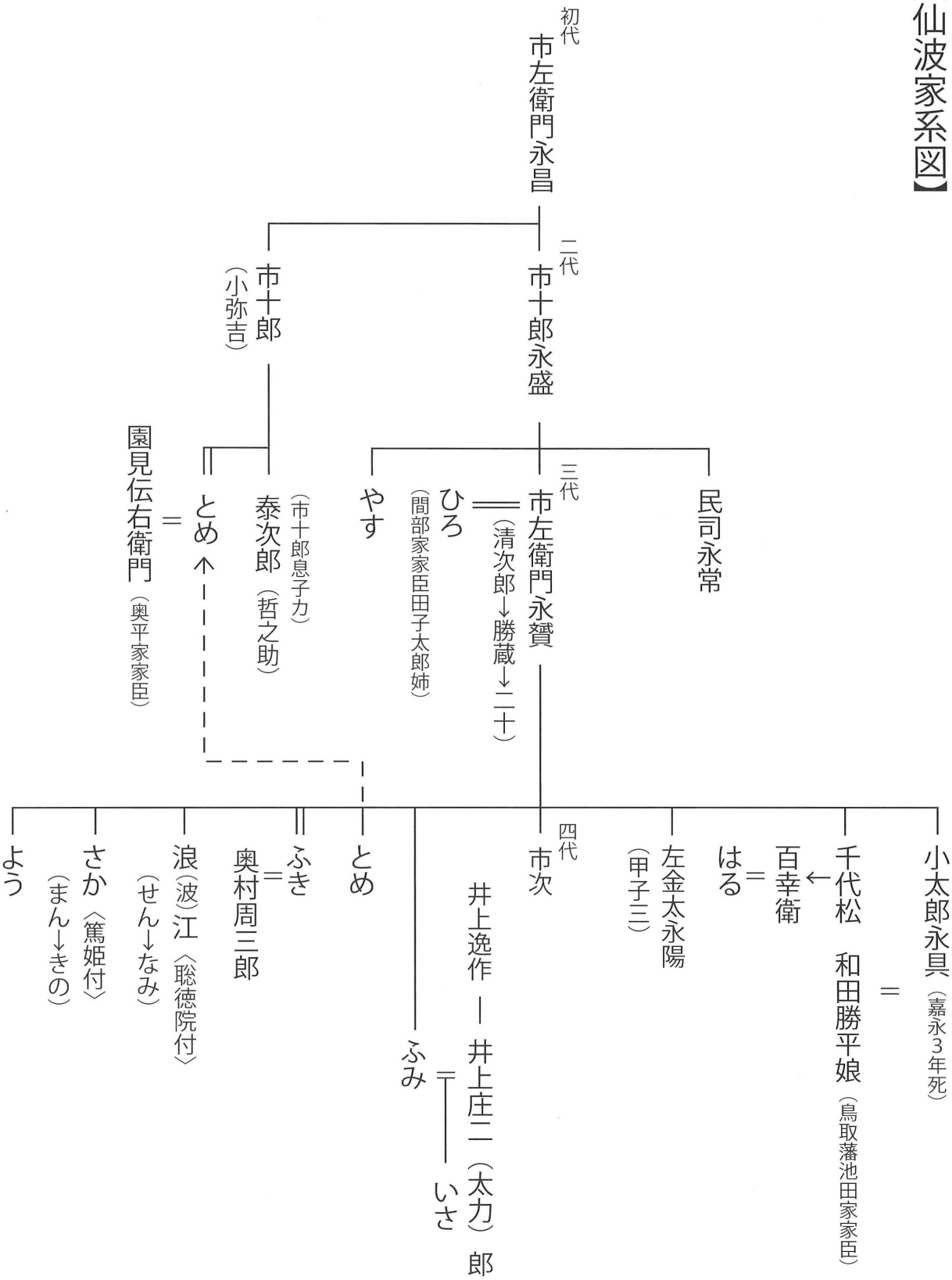
三代　市十郎二男清次郎は享和三年（一八〇三）に生まれる。清次郎→勝蔵→二十→市左衛門と名乗りを替え、実名は永明のち永贇と改める。文化十年七月、高輪御殿の大隠居重豪に召し出され、同居する桃次郎（黒田斉溥）の御相手となる。文化十一年（一八一四）啓之助（今和泉家へ養子島津忠剛＝篤姫実父）に仕えるため、隠居斉宣の白金御殿へ移る。同十二年四月、勝蔵の嫡子願を祖父市左衛門が出す。同十三年八月藩主斉興に初御目見をはたす。同十四年二十と改名。文化十五年（十六歳）二月十三日、斉宣付奥小姓となる。

二代娘　市十郎娘やすは文化十四年七月一日、出生男子（斉宣息子松平定穀＝伊予松山藩主）の御側女中を仰せつけられる。

三代市左衛門の詳しい経歴とその子女については、⑧より見ていきたい。市左衛門には三男五女がいることが確認できる。嫡男小太郎は嘉永三年鹿児島へ行く直前に死亡。二男千代松は百家へ入り幸衛と名乗りを改める。三男甲子三は左金太と改名して嫡子となるが家督を継ぐ前に死去し、田上家より養子を迎える。長女ふみは側用人井上逸作嫡子庄二郎（庄太郎か）に嫁す。次女とめは叔父市十郎の養女となる。三女せん（浪江）は聡徳院（斉宣娘聡姫・陸奥白河藩主阿部正篤正室）付女中、四女まんが篤姫付中臈さかとなる。五女よう（陽）は体が弱く手元にいる。

ここからは年代順に抑えていきたい。文政六年五月、二十（三代市左衛門）に妻取りの話があり、鯖江藩間部家家臣田子太郎姉ひろと結婚し、同年十月藩より許可される。同七年閏八月継目を許され、十月五日に家督御礼を済ませる。斉宣付奥小姓であった二十は、文政十年正月斉宣付小納戸見習となる（二十五歳）。同十二年七月三代にわたり新番入。天

【仙波家系図】


初代
市左衛門永昌
二代
市十郎永盛
市十郎
（小弥吉）
民司永常
三代
市左衛門永贊
（清次郎→勝蔵→二十）
ひろ
（間部家家臣田子太郎姉）
やす
（市十郎息子カ）
泰次郎（哲之助）
とめ
園見伝右衛門（奥平家家臣）
小太郎永具（嘉永3年死）
千代松
和田勝平娘（鳥取藩池田家家臣）
百幸衛
はる
左金太永陽
（甲子三）
四代
市次
井上逸作
井上庄二（太力）郎
いさ
ふみ
とめ
ふき
奥村周三郎
浪（波）江〈聡徳院付〉
（せん→なみ）
さか〈篤姫付〉
（まん→きの）
よう

保三年正月、二十より市左衛門と改名。天保五年正月白金付小納戸、役料米四八俵、三十二歳。天保六年斉宣の高輪御殿移徙により仙波家も住居を高輪屋敷内に移す。

天保六年六月、嫡男小太郎が番入をする。市左衛門は同七年湯治のため指宿にいく。同八年十一月、高輪付納戸奉行、小納戸兼務、役料米七三俵、三十五歳。同十年七月、高輪付小納戸頭取、御用取次見習、役料同前、三十七歳。重き御用向取扱との感想を記す。

天保十一年（一八四〇）九月小太郎が高輪付小姓となる。同年十二月、高輪付御側役、役料高九〇石、納戸奉行勤、切米十五石、三十八歳。斉宣が来年正四位上に昇進することになったため、翌年正月斉宣の位階昇進御用掛を仰せ付けられる。

天保十二年閏正月、小太郎（永真、十五歳）が初御目見し、二男千代松が百家をたてる。同年七月長女ふみが井上逸作（側用人）嫡子庄二郎（庄太郎か）と縁組をする。

天保十二年十月二四日、市左衛門と小太郎が仕えていた斉宣が死去する。当日この記載は無いがしばらくあとに「中将様（斉宣）御逝去後依願御役御免被仰付、翌日御納戸奉行御役被仰付」とある。市左衛門は斉宣の死後自ら職を辞すが、天保十三年四月納戸奉行に復職し、小太郎は新たに斉彬付小姓（当時十六歳）となる。仙波家はそのまま高輪屋敷内に居住している。

天保十四年六月、千代松は身寄りのない真如院の宿許を仰せ付けられる。真如院については「真如院方事　大慈院（斉宣）様御側江多年相勤　御子様方御実母ニ而追々格式とも結構被仰付（後略）」とあり、斉宣側室で子を産んだ人物である。真如院こと百十は島津樵嵐久尹養女で、斉宣との間に八人の子を産み、そのうち松平定穀・晴姫・種子島久珍・寵姫の四人が成長した[1]。斉宣の晩年は唯一の側室として、その寵愛を受けた[2]。

弘化二年（一八四五）七月、市左衛門の妻は伊集院鉄次郎の妻と共に、斉彬付中臈見習が産む予定の赤子の乳付を仰せ付けられる。

弘化四年正月、聡徳院の御用を仰せ付けられる。このことが縁となったかはわからないが、後に三女浪江が聡徳院付女中となり、市左衛門自身も結びつきを強める。

嘉永二年（一八四九）正月、百千代松が初御目見をはたし、小太郎が松平喬松丸（烏取藩池田慶栄）家中和田勝平娘と縁組を交わす。同年八月、千代松は斉彬付小姓となるが、そのまま高輪屋敷の市左衛門方に同居。同年斉彬付中臈格ふきを市左衛門の養女にして家中奥村周三郎と縁組させる。

嘉永三年四月、市左衛門は鉄砲奉行に役替えとなり、江戸定府御免、家内とも国許鹿児島へ引越しを命じられ、金一〇両を給う。同月十六日市左衛門は次女を叔父市十郎の養女し江戸に残す。また小太郎の妻も病弱なため親元に預けて鹿児島へは連れて行かないこととする。

嘉永三年四月二十八日、市左衛門は妻ひろ（四十三歳）・せん（十八歳）・まん（十五歳）・よう（十歳）・三男甲子三（八歳）並びに下男下女を連れて江戸を発ち、六月六日鹿児島へ入り、加治屋町に拝領した一四七坪の屋敷に居を定めた。

記載が無いためいつか定かでないが、下国前後に嫡男小太郎が死去しており、同年九月十五日二男は別に家を起したので三男甲子三を嫡子にしたいと願いを出し、翌四年正月甲子三を嫡子とする許可が下りる。

嘉永四年二月二日、島津家で代替りがあり、斉興が隠居して斉彬が家督を継いだ。

嘉永五年六月十九日、なぜか市左衛門は逼塞を命じられるが、七月晦日に赦免される。同年七月二十一日　仙波市十郎の養女となった市左衛門娘とめと奥平大膳大夫昌服家来園見伝右衛門との縁組が成立する。

嘉永六年正月、千代松は幸衛と改名する。同年五月、甲子三は左金太

と改名し御目見をする。

同年五月二十一日、広敷用人が市左衛門に娘まん（満舞）を篤姫付御番人として召抱えることを告げ、まんは六月二日に鶴丸城大奥へ入る。七月三日にはさらにせん（勢舞）も篤姫付御側女中に召抱えられ、まんも御側女中となる。七月二十日まん事きの、せん事なみは眉を剃り元服する。篤姫の江戸出府につき両人とも御供することになり、八月二十一日鹿児島を出発した。この詳細については次章で述べることとする。

一嘉永六丑年五月廿一日、御広敷御用人ゟ拙者裃袴着用罷出候様申来、罷出候処

篤姫様御附

一　御番人　　仙波市左衛門娘

　　満舞

右之通被　召抱之

五月

右之通御広敷通番所ニ而山口右源太ゟ致承知候、左ニ而六月二日大奥へ差上申候事　　（⑧嘉永六年五月二十一日条）

一同年七月三日、御広敷御用人ゟ拙者裃袴御用申来候罷出候処

篤姫様御附

一　御側女中　仙波市左衛門娘

　　勢舞

右之通被　召抱之

七月

右之通丑七月三日御広敷通番所ニおひて御広敷御用人小森新蔵を以承知いたし、同月廿五日ゟ御本丸大奥へ差上申候事

（⑧嘉永六年七月三日条）

嘉永七年（一八五四）正月十一日、市左衛門は馬関田（まんがた）地頭職を仰せ付けられ、鉄砲奉行と納戸奉行も兼務する。同年五月、鹿児島への引越しや娘二人が篤姫付となったことで借財がかさんだため援助を願い、閏七月二〇〇両の拝借が叶う。

安政二年（一八五五）四月、左金太は江戸詰を仰せ付けられ、市左衛門のもとをはなれる。同年五月、なみは浪（波）江と改名し、芝大奥より聡徳院付を務めるよう仰つけられ、阿部家の麻布龍土屋敷へ移る。

安政三年九月、きのは篤姫付中﨟として幾島・関野・ふく・りえ（最終メンバーではない）と共に江戸城に上がることが決まり、仕度料として金二七〇両を頂戴する。

安政三年十月、市左衛門は側役に転じ再び江戸定府となり、引越料として金三〇〇両を拝領する。十一月一八日家内召連れ鹿児島を出立、翌年正月十三日江戸高輪屋敷に無事到着し、程なく渋谷屋敷へ引き移る。

安政四年三月、上屋敷御殿建替用掛、四月には来年の琉球人参府御用取扱、十二月斉興の位階昇進御用掛を拝命し、十二月二十九日斉興の三位昇進御用精勤につき褒美を給わる。

安政五年三月五日、前記の功により側用人、役料高一四〇石、高三五石となる。国許にいた幸衛と左金太は当秋参勤の御供を仰せ付けられる。同年十二月、左金太は又次郎（島津忠義）の御供で帰府し、奥小姓となる（十六歳）。

安政六年三月、勝姫の国許下向吟味用掛を仰せ付けられる。同年八月上屋敷御殿廻り建替え骨折りにつき紗綾二巻を拝領。同月二十八日百幸衛と高木主水正家来高木新兵衛娘と縁組を届け、九月二日に許可される。さて⑤によると、幸衛と高木家娘はるとの縁組は安政四年七月に成立し、はるは十一月に仙波家へ引き移るが、正式の婚礼がこんなに遅れたのはなぜであろうか。

万延元年（一八六〇）十月、市左衛門は大奥勤側御用人となり、文久元年七月には、川々御普請御用掛を仰せ付けられる。同年十月、幸衛は小納戸見習となる。

文久二年（一八六二）二月、市左衛門は町奉行に役替えとなり、再び国許鹿児島へ移ることとなる。役料高九〇石、切米一五石、六十歳、引越料として二〇〇両を頂く。嫡子左金太だけでなく、百幸衛も定府御免となり、二人と妻・よう・幸衛妻はるを連れて二月朔日旅立った。同月二十二日鹿児島に到着し中福良の屋敷に入った。

同年三月には天璋院付さかと聡徳院付浪江の処遇について伺いを出している。

仙波市左衛門事此節御国許御役替被　仰付家内引越被仰付候付而、同人娘義　順聖院（斉彬）様思召を以　御入城之時分御供被仰付さかと申候而当分ニも　天璋院様御中臈出勤罷在候、右者御国許引越等被仰付候付、此度御暇可成下哉、其儘被召仕候義ニ御座候哉、若其儘被召仕候ニ候者宿許之義何様可被仰付候哉、此段奉伺候事

一右同人娘浪江と申候而　聡徳院様御方へ被召仕候同人義も、右同断如何可被仰付候哉、奉伺候事

戌三月二十四日　西筑右衛門（親類）　（⑧文久二年七月三日条）

市左衛門が国許へ引っ越すにあたり奥女中として仕えている二人の娘について、暇をとらせて連れて行くかそのまま召し使うか、そのまま召し使う場合は宿許をどうするか、親類の西筑右衛門を通じて伺いを立てた内容となっている。結果として、さかがそのまま天璋院に仕え続けたことははっきりしているが、浪江についても聡徳院の元に残ったと思われるが、幕末期の動向は不明である。聡徳院は明治五年八月八日に没している。

文久三年九月、幸衛は細工奉行、左金太は寺社方取次となる。文久三年六月二十七日イギリス船七隻が前の浜へ侵入、薩英戦争が起こり幸衛は太鼓役として出陣した。元治元年（一八六四）にも幸衛は長州征伐に出陣し、仙波家も幕末の混乱に巻き込まれていく。さらに慶応三年二月幸衛は上京し陸軍兵隊に入る。このとき幸衛の嫡子千代松は三歳である。

慶応四年（一八六八）二月十五日、嫡子左金太が昨年病死し、男子がいないので田上庄司の二男市次を養子にしたいことを申し入れ、同年許可されて、仙波市次となる。同月、市左衛門は永賛の読みを、「ながよし」より「ながたか」に替える。これは藩主忠義の呼び名を憚ったことによる。

明治六年（一八七三）二月九日、市左衛門は津守と改名し、同年四月十七日七十余歳になったのを理由に家督を養子市次に譲り、隠居した。

二、篤姫とさか

ここからは②③⑤の日記を中心に見ていくが、嘉永六年については一部記載を「嘉永六年　表方御右筆間日記」[3]より補った。

嘉永六年（一八五三）正月元日、市左衛門は島津家の菩提寺福昌寺へ行き、御霊屋へ参詣。元旦・二日は出勤なく、三日の謡初に出勤。九日に昨年十二月十六日に斉彬が従四位上中将に昇進した知らせが来て、祝儀がある。

十一日せんとまんは下人と下女を連れて出宅、諏訪天神などへ参詣の後、夕刻市田家へ参り泊まって翌日帰る。市田家は広大院（寔子）の生母の実家で家老を輩出した家である。家族ぐるみの交流がありしばしば子供たちは市田家に行き泊まって帰る。市田家同様親密な交流があり、子供たちが頻繁に訪れるのが田上家である。市左衛門は後に田上家から養子をもらうことになる。

十五日せん・まん・ようの三姉妹は津曲へ三味線の浚いに行く。江戸で奥女中になるには三味線などの歌舞音曲の素養が求められたが、市左衛門が娘たちに三味線を習わせていたのは、将来奥向に上げる意図があったのだろうか。せんは縫物の稽古もしている。

篤姫がはじめて日記に登場するのは三月二十九日の条である。

江戸表当月十二日立急飛脚今日到着　篤姫様事　御前様御養被仰出御用番様へ相成候御一件申来ル、右ハ今和泉御嫡女様ニ而おいち様と申候

（②嘉永六年三月二十九日条）

ここには二つの重要な事項が記されている。一つは篤姫を「御前様」斉彬正室英姫（恒姫）の御養いとするということで、御養いとは正室以外の者を生母として生まれた子供に対し、正室が嫡母の立場となるというものである。もう一つは篤姫が今泉家で「かつ」ではなく「いち」と呼ばれていたことである。いち説はすでに崎山健文氏が提唱されていたが[4]、それを確定させる証拠となり得る。四月六日、篤姫と暐姫が英姫の御養いとなった祝儀が仰せ渡される。

四月には、篤姫の本丸（鶴丸城）大奥住居が触れられ、当秋の参府行列は聡徳院の例に倣うこととなった。

四月二十日朝、花浦尼がせんの御殿上りについて内談に入来、花浦尼は昼のうち御殿へ参り夕刻再度来る。花浦尼は田上家の人で、恐らくはかつて島津家大奥に奉公していた比丘尼と推察できる。元奥女中が御殿奉公を斡旋する例はよく見受けられる。娘の御殿上りについて極内々にまんの方であるとくるが、別の人からはせんであるといわれ混乱していたが、二十四日伊木よりまんであるといわれる。

五月三日斉彬が江戸を発ったとの知らせが入る。五日は田上家嫡子の初節句につき、妻とせんが参り馳走を受ける。翌日柏餅を作り返礼として田上へ差し上げる。花浦尼がまんの御殿上りについて夕刻入来。十四日も花浦尼が入来し、まんが今月末御殿上りするよう大奥から達しがあったことを伝える。

二十一日、麻袴着用で広敷通番所に罷り出た市左衛門に対し広敷用人より次の達しがあった。

篤姫様御附　仙波市左衛門娘
御番人
右之通被　召抱候

右之通御広敷御用人山口宇源太殿ゟ致承知、又口達に而上り之節ハ追而頃合可申達との事（後略）

（②嘉永六年五月二十一日条）

各藩が藩士の娘を自藩の奥向へ上げる時は命令性の強い「召出」を使うことが多く、「召抱」は江戸藩邸などで町人・農民や幕臣・他藩士の娘を採用するときに使うことが多い。ここには「召抱」とあるが、次に述べるせんの件からも、強制の「召出」であることがわかる。

二十二日市左衛門は田浦の市田家、伊集院家にまんを連れて暇乞いにいく。その後もまんを連れて隣家や田上家、各家に暇乞いに行く。これを細かく見れば鹿児島における仙波家の交友関係がわかるが今回は割愛したい。二十三日花浦尼より今和泉へ礼の文を出すとのことなので、市左衛門よりも肴料を添える。

二十四日広敷用人よりまんを、二十八日に御殿へ上るように指示が来る。しかし、二十六日市左衛門は広敷用人梁瀬善左衛門へ面会し、まんの体調が悪いので延期を願い、花浦尼へもそのことを告げる。まんは緊張で体調を崩したのであろうか。六月一日まん快気のことを申し入れると、翌二日上げるよう指示がきた。まんは諏訪社天満宮参詣し、墓参も済ませる。

六月二日まんは駕籠一艇・釣台一棹・箪笥一棹・長持一棹、ならびに下女もとを連れて御殿に上がった「おまん事今日□大鐘頃ゟ御本丸大へ駕籠ニ而上ル」。花浦尼も先に御殿へ入り待っていてくれた。翌日田上へ行き花浦尼に滞りなく済んだ礼をする。

五日今和泉屋敷を出て鶴丸城へ入る篤姫を迎えに、まんは今和泉家へ行く。この時の迎え人はまんと御年寄園河の二人きりである。

篤姫様御事今日午之刻、今和泉御やしきゟ御台所御門御広敷御玄関ゟ御上り、右付おまん事御年寄一緒ニ四時ゟ今和泉へ御迎ニ差越、御跡乗相勤候由

（②嘉永六年六月五日条）

六日江戸より江戸屋敷の大奥を取り仕切る大年寄小の島ら御供女中が斉彬に先立ち到着、いつも藩主に御供する女中に加え当秋篤姫出府の御迎女中も六・七人程一緒に到着する。

此度江戸表ゟ御供之女中到着、右常之外ニ当秋篤姫様御出府ニ付而御迎女中も六・七人程一緒ニ着之由　（②嘉永六年六月六日条）

今回小の島は鹿児島に下る途中京都で公家の娘を三人召抱えている。

二十二日には斉彬も無事に鹿児島へ着城し、御供してきた百幸衛も市左衛門の元に安着した。

二十七日、篤姫付御供女中が不足しているので、せんも大奥へ上げるよう、市左衛門にとっては驚愕の仰せが来る。翌日市左衛門はせんを御殿に上げる件について抵抗を示す。

（前略）おせん御殿へ上り候事、誠ニ以思召之程何とも冥加至極重畳難有仕合ニて御座候、何分跡々之処両人之子ともいまた幼少老人ハ兼而病身ニ有之殊ニ妻事近頃至而身弱ニ有之、外ニ親類縁者も無之事御座候へハ、追々之處兎も角此両三年之處奉恐入候事ニ御座候無據御断申上度夫も不相整義御座候、今日おまんと引替相成候而も宜候か両人之内壱人ハ御免被仰付候様奉願段申候処（後略）

（②嘉永六年六月二十七日条）

せんということならまんと引替にしてくれないか、二人のうち一人にしてほしいと嘆願している。二十九日、せん一件について井上に内談する。この井上は井上逸作と推察できる。側役である逸作は斉彬に従い鹿児島に入り、篤姫の広敷用人となっている。

しかし、七月三日に「仙波市左衛門娘を篤姫様御附御側女中に召抱えるので、来る五日に大奥へ差し上げるよう」広敷で通達を受ける。それでも納得できない市左衛門は、一先ずはせんの病気届けを出して切り抜け、一人は手元に置きたいと諸方に相談する。

四日、まんは篤姫付御番人より御側女中となり、きのと改名。この時の篤姫付女中は表使格御守関野、御側女中ふく・きの・つさ・やのの五名である。七日の「嘉永六年　表方御右筆間日記」にはまだ正式に上がっていないせん事なみの名前も記されている。

娘たちのことで気をもんでいる最中にも政局は動いており、九日に届いた江戸よりの飛脚で将軍家慶の薨去を知り、二十二日には長崎表にロシア船四隻が渡来した報に接する。

あきらめたのか市左衛門は二十二日にせんの全快届けを上げる。せんは田之浦の誠恐院（斉宣側室、聡徳院生母）ならびに市田家へ暇乞い、翌日は墓参をした後、伊木・田上へ暇乞いを済ませる。

二十五日せんは大奥へ駕籠にて上り、翌日なみと改名、御側の頭を仰せ付けられる。二十七日磯御殿に入った篤姫に、なみ・きのも御供をする。

二十八日、市左衛門嫡子甲子三（実名永陽）は通称を左金太と改名し、藩主斉彬に初御目見をはたす。同日きのは宿下りを願い、今晩より五夜許される。奉公に出たばかりのきのに宿下りを許したのは、娘二人を篤姫付とさせられた市左衛門への配慮であろうか。宿下りしたきのに篤姫より金二百疋が与えられる。八月三日御供仕度料として金十五両ずつ拝領する。四日、五夜の暇を済ませたきのは駕籠にて御殿へ上る。御礼として篤姫に肴一折を進上、御年寄へも一折贈る。

八月九日篤姫は諏訪祇園社へ参詣し、なみ・きのも御供する。十一日斉彬・篤姫が玉里別邸へ娘両人も御供する。十三日妻はようを連れて御殿奥部屋のなみ・きのを訪ねる。

二十一日、篤姫は江戸に向かうため鹿児島を出立した。

篤姫様今朝五時御供揃四時打切頃御広敷御玄関出立、江戸表へ御発輿、おなミ御先番おきのハ御供之由ニ而、いつれも元気ニ出立いたし候事　（②嘉永六年八月二十一日条）

娘二人も元気に御供した。仙波家では花浦尼らを呼んで、娘出立の跡祝いを行なった。

二十二日苗代川へ篤姫到着。二十七日、出水より二十四日に出した娘二人の文が鶴丸城大奥へ届き、市左衛門の手元に遣わされる。二十九日は市左衛門よりも文を出す。その後も姫路・伏見より出した二人の文が仙波家へ届けられる。篤姫は九月二十日に姫路を出、十月二日には内々に近衛家へ参り、六日伏見出立、同月二十三日江戸表へ安着し、二人の娘も滞りなく御供を勤めた。

十一月二十六日　先月晦日江戸において姫が誕生し、寧姫と名付けられたと知らせが入る。

安政元年（一八六四）・二年と記録は無く、市左衛門の次の日記は安政三年正月に飛ぶ。四人の娘ふみ・とめ・浪江（なみは聡徳院付となり浪江と改名）・きのと二人の息子幸衛・左金太は江戸に居り、鹿児島の仙波家では寂しい正月を向かえる。とは言え正月六日には浪江より御所落雁一箱・きのより木の葉餅、地震の戯絵十六枚（前年十月安政の大地震）が届き、市左衛門よりも浪江・きのらへ様々なものを送っている。

市左衛門は鹿児島にいるが日記には篤姫に関する記事も散見するので拾っていこう（日付は日記の記載日である）。

三月十六日、江戸表より先月二十九日に急飛脚で出した文が到着、先月二十八日斉彬が登城した際、老中阿部伊勢守正弘より篤姫の縁組が仰せ出される。十九日篤姫の吉左右について江戸表へ飛脚を出す。四月十九日も篤姫に関する急飛脚が出される。

四月二十五日、篤姫を近衛忠熙の養女にして縁組することの記載がある。

太守様（斉彬）月次ニ付去ル朔日被遊　御登　城候處、　篤姫様御事　近衛様御養女被仰出御縁組為御由緒柄御窺とも弥増恐悦之御事候間、近衛様へ御熟談為　在候様阿部伊勢守様より被遊御承知候段御到来（後略）　（③安政三年四月二十五日条）

五月八日、江戸表を四月二十四日出た便りが今日到着し、それにより篤姫御用として錦・緞子類を準備することを指示される。十一日も同様の記事があり、十六日には江戸表より見本が送られ、このように誂えるよう明石屋に調進を命じる。さらに七月六日には「篤姫御用相成候間御買上之都而江戸廻り御渡し候御家老衆ゟ致承知（後略）」とある。二十二日には明石屋八兵衛が調進した篤姫の帷子ができあがる。さらに八月・九月と篤姫の呉服に関する記事が散見するが、八月十日には琉球渡来の帷子を進上している。

御台所となる篤姫の衣装であるから、京都や江戸で整える印象がある。勿論、それらの所でも調達したのであろうが、地元鹿児島でも積極的に調進している。地域における呉服の技術を考える上で興味深い内容である。

八月一日、篤姫は近衛家の養女となり「篤君」の君号と「敬子（すみこ）」の諱を賜り、十一月上旬に江戸城広敷へ入輿の予定と知らせが来る。二十八日、篤姫の江戸城入りにきのが御供として上ることについて今月十日に内談があり、井上ときのが承知した旨の知らせが届く。

九月二十三日、江戸表よりの飛脚で、幾島・関野・ふく・きの（仙波娘）・りえが篤姫江戸城入りの節、御供することが決まる。

一右便申候　　幾しま
　　関野
　　ふく
　　きの
　　りえ
右御広鋪江　　篤君様　御入之節御供可被　仰付候由、　御内意相達置候様被　仰付候事
右之通八月十日渋谷大奥ニおひて被仰付候
一金弐百七拾両
右同断付仕度料として同廿日頂戴分仰付候　御外四人も夫々勤

ニ応し被成下候由

一　篤君御附御中臈

御側女中

きの

右之通被　仰付候

九月

右当月朔日於渋谷大奥被　仰付候

右之通被仰付候度旁吹聴申越、福分として肴料金弐百疋到来候事

（③安政三年九月二十三日条）

きのに御城御供上り仕度料として金二七〇両が渡される。市左衛門が一家を連れて江戸に戻るときの仕度料が三〇〇両であり、かなり破格の金額といえる。実際に入ったメンバーは幾島（宿許：今大路民部権少輔）・留野（宿許：永江藤右衛門）・さか（仙波娘）・りき（宿許：岩本太右衛門）・ほの（宿許：逆瀬川玄斎）である。きのがさかと改名したように他のメンバーも改名した可能性が高いが、メンバー交代の余地も残されている。

九月二十九日、きのへ誂えた縮緬、鶉ようし、手拭を、十月二日には平元結紙などを送っている。さらに八日には「御城上り御供心得方」を書いて送っている。娘を心配する親心が感じられる。

十月十一日、側役となった仙波市左衛門は再び江戸定府を命じられる。家内を召連出府するための仕度金として金三〇〇両を賜る。二十三日転役につき地頭所である馬関田より挨拶がある。御廟所・御霊屋へ拝礼、墓参を済ませ、市田家、田上家、花浦尼などへ別れの挨拶を行なう。十一月十八日、鹿児島出立。

江戸における市左衛門の動向は次章に譲り、続けて篤姫に関する記載を見ていこう。

十二月十七日江戸への道中、大坂屋敷で市左衛門は篤姫が去る先月十一日に入城し、きのはさかと改名し無事御供上りをしたとの報に接する。

篤姫様御事旧冬十一月十一日無御滞被遊御入　城十二月十一日御結納御祝儀為　在同十八日御婚姻為　整候付、御当日ゟ　御台様との御称号被　仰渡、翌十九日初而御使御広敷御用人を以干鯛壱箱御両殿様より　御拝領之由（中略）

おきの事さかと改名被　仰付十一月十一日難有御供ニ而　御本丸へ上候事

（⑤安政四年正月十五日条）

入城をはたした篤姫は十二月十一日に結納、同十八日に婚姻を済ませ、御台様と称される。

二月七日、さかの下女としていねを御城に上げることとする。十九日には本丸のさかへ初めて文を出す。三月二十二日江戸城より下がったいねはこの御殿（島津家渋谷大奥）へ一宿、翌日麻布（阿部家聡徳院方）へ一宿して江戸城のさかの元へ戻る。十月にもいねは御城を下がり渋谷大奥に一泊して戻る。

四月四日、市左衛門は篤姫「御台様」より拝領の菓子を、英姫「御前様」より頂戴する。さらに篤姫より七日には雛道具を、八日には小袖を頂戴する。

七時後御年寄小の島ゟ急ニ致面会度段御広敷ゟ申来候、致出勤度處御城ゟいたゝき之御品にて　小袖之物は被相下候、早々　御中途へ相届候様取計呉度趣候（後略）

（⑤安政四年四月八日条）

参府した斉興は四月十一日、篤姫へ献上物を差上げ、本丸より老女奉文の挨拶が来る。

四月十二日朝、市左衛門の妻は井上家より立ち寄った長女ふみを同道して、江戸城のさか方へ行き、部屋向や詰所を見物後、宿泊して、十五日に帰る。閏五月十三日なかという女性を江戸城のさか方へ差し遣わし、二夜泊まり戻る。なかは十二月にも二晩さか方に止宿している。なかは市左衛門が鹿児島にも連れて行っている仙波家の使用人である。市左衛

門は妻や娘にも「お」を付けているが、使用人に対しては呼び捨てで記載する。娘さかを心配した市左衛門が、なかに様子を見に行かせたのではないだろうか。

五月十一日、本丸のさかより文が来る。

御本丸おさかゟ今夕文到来（中略）此九日九時分ゟ吹上へ　公方様　御台様被為成、御帰りニハ御同道なとニ而至極之御□□之由、おさかなとも於吹上　公方様御酌等ニ而御酒なと戴き誠ニ有かたき段内々申越候事

（⑤安政四年五月十一日条）

五月九日、家定・篤姫の吹上御成に同行したさかは、家定よりお流れを頂戴した。さらに七月二日には家定より時服を拝領する。

公方様ゟおさか事御時服三綸子亀綾さらし昨朔日初而拝領被　仰付段吹聴申越御品為致拝見候、御帷子御節句ニ着用いたし御礼申上候事之由

（⑤安政四年七月九日条）

六月十八日、さかへ暑中見舞いの品を遣わす。七月八日には、肴一折、絵半切一箱を聡徳院へさかより進上する。十四日、さかより生身玉（子から生きている親へ長寿を願って物を贈る風習）につき肴料二〇〇疋、晒を戴き、返礼に肴二〇〇疋と西瓜を贈る。九月十三日は篤姫より月見につき肴・菓子を拝領する。十月十九日本丸大奥御使番さよ治（小夜路・篤姫付御使番）が岩元宅に逗留し、さかのことで面会したいというので妻が会いに行った。用件の内容は記載されていない。

十月二十二日、市左衛門は御台所献上金について、大奥へ通り小の島に用談する。献上金五〇〇両の話はこれ以降も続くが詳細は次章に譲りたい。

十二月十一日、御台様（篤姫）より歳暮祝儀の使いが薩摩藩邸に使わされ、斉彬・斉興への拝領物、干鯛一箱・金十枚を島津忠寛（佐土原藩主）が名代として受け取った。十二月二十一日、今度は家定・篤姫より英姫へ歳暮の祝儀として広敷番頭が遣わされる。広敷番頭大谷木安右衛門は広敷玄関より入り、拙者つまり市左衛門、側用人、留守居岩下佐次右衛門らが挨拶に出る。大八木を大奥客間に案内、その後は御年寄が干鯛一箱を受け取る。退出した大谷木は広敷用人詰所で英姫より吸物・酒・膳の饗応を受ける。

慶応四年（一八六八）四月十日、江戸開城の前日に一橋邸に移った天璋院（篤姫）は、その後築地の一橋下屋敷、青山の紀州邸、尾張藩下屋敷の戸山邸と居を替え、明治六年（一八七三）には赤坂溜池に近い福吉町の旧相良藩下屋敷に移り、ここで静岡から戻った家達（十六代徳川宗家）と暮らすことになる。明治十年には完成した千駄ヶ谷邸に移り、そこで生涯を閉じる。

この間もさかは天璋院と行動を共にし、明治十六年十一月二十日その死を看取ることとなるが、天璋院の死後も暇をとらず千駄ヶ谷徳川邸で女中として働き続ける。

家達と近衛忠房娘泰子との「御婚礼御祝い手ひかへ」（明治十六年・一八八三）[5]をさかはりきと共に認めている。

さかは嘉永三年（一八五〇）に十五歳（数え年）であることから、天保七年（一八三六）生まれであることがわかる。では何年に死去したのだろうか。家達の娘で明治三十年生まれの綾子と綏子の思い出話の中にさかが登場する[6]。二人の記憶は明治三十五年頃より始まる。さかは女中頭として千駄ヶ谷徳川邸の奥を取り仕切っており、「さかは天璋院様のお供をしてきた者で、天璋院様の命日の二十日には上野の寛永寺にお参りに行き、帰りにはいつも松坂屋に寄っていた」と二人は笑って話す。さかが明治期に亡くなったのか、大正期まで生きたのかは不明である。

三、江戸での生活と市左衛門の役目

（1）島津家の姻戚関係と市左衛門の交流

安政四年（一八五七）正月十三日朝、川崎宿を出立した市左衛門ら一行は、品川宿の手前の浜川川崎屋で、出迎えに訪れた仲間の藩士、菊地藤助・長崎助左衛門・園田八十右衛門らや、叔父仙波市十郎、娘ふみ・とめ・浪江と落ち合い酒を酌み交わし、七ツ時頃に高輪屋敷五三番長屋へ到着した。その後、二月二十九日に渋谷屋敷へ引き移る。

安政三辰年十一月十八日家内召列　御国許出立、翌巳年正月十三日江戸高輪屋敷へ安着、無程渋谷御屋敷御引移可申付被　仰付、同二月廿九日渋谷御屋敷引越候事、（御初ハ西向御やしきへ着之儀之由候所、正月十一日暁之火事ニ而俄ニ高輪御やしきニ相成候由も、）三月十八日高輪江　宰相（斉興）様御光着故、渋谷江引移被　仰付候事

（⑧安政四年二月条）

ここで、安政四年の薩摩藩の江戸屋敷、島津家の人々、仙波家やその周辺の人々を抑えておこう。安政の大地震（安政二年十月）で芝屋敷が半壊し、藩主斉彬・正室英姫らは渋谷屋敷に移り、藩の政庁もここに置かれる。安政三年十一月篤姫は渋谷屋敷から江戸城へ入る。高輪屋敷には隠居斉興が住まい、桜田にも屋敷がある。さらに、島津一族である聡徳院が住まう麻布龍土の阿部家江戸屋敷や、信順の婿入り先である八戸藩南部家の麻布市兵衛町上屋敷も渋谷屋敷より比較的近い距離に位置する。

市左衛門が江戸に戻ってきたとき、二人の息子百幸衛と左金太は長女ふみの嫁ぎ先である井上家に厄介になっていたが、井上逸作の西向屋敷（渋谷屋敷内の藩士の住い）は十一日に火災に遭い類焼した。西向屋敷に入る予定であった市左衛門も急遽予定を変更して、高輪屋敷に入ったが、斉興が鹿児島から到着する前に渋谷へ引き移った。

その後、市左衛門は左金太を手元に引き取るが、幸衛は逸作が体調を崩していたため井上家に残る。とめは奥平家の家臣園見伝右衛門に嫁いだので、奥平家の江戸屋敷に居るはずである。浪江は白河藩阿部家の下屋敷麻布龍土の聡徳院に仕えており、さかは篤姫（御台所）付中臈として江戸城本丸大奥にいる。

三月十八日斉興が鹿児島からもどり高輪屋敷に入り、それと入れ替わるように四月三日斉彬は江戸を発駕し鹿児島へ向かった。江戸を経つまで、斉彬は精力的に一門の人たちに会っている。その行動を追いつつ島津家の姻戚関係を抑えておこう。

正月十九日、斉彬は供揃で年頭の挨拶に御三家（尾張・紀伊・水戸）・老中へ廻勤後、山内豊信（容堂・松平土佐守）へも廻る。二十二日老中阿部正弘を訪問する。二十八日と二月朔日は江戸城へ定例の登城。

同二日には力士を屋敷に召し呼び、馬場において相撲を取らせ、南部遠江守信順と松平（黒田）美濃守斉溥が見物のため入来した。

一今日力士とも召呼、於馬場角力御演有之、四半時後ゟ初り御馬場見所御覧、大奥ゟも為入暮分相済

一南部遠江守様右為御見物四時後表御門御玄関ゟ御出、無程御馬場見所へ御出、松平美濃守様も八時後、右同断御馬ニ而裏御門ゟ御出、直ニ御馬見所へ御通り、相済後大奥へ為入、御両所様も夜ニ入四時分御玄関表御門ゟ御立之由

（⑤安政四年二月二日条）

八戸藩主南部信順と福岡藩主黒田斉溥は共に島津重豪の息子で、斉彬には年下の大叔父にあたり藩主就任に尽力してくれた人物である。二人は相撲見物の後、大奥へ入っている。

一方市左衛門も江戸出府の挨拶として、聡徳院へは勿論、随真院（斉宣娘・日向佐土原藩主島津忠徹室、当時の佐土原藩主は島津淡路守忠寛）・寵姫（斉宣娘・小田原藩主大久保忠愨室）・晴雲院（斉宣娘・久留米藩主有馬頼永室）を訪れ各姫付御年寄の案内で奥に通り、直接面会している。

二月十五日、斉彬の江戸城の殿席が大廊下下之部屋になる。

太守様御事朔望其外大廊下下之御休息所へ御控被遊、年始五節句等ハ此迫之通与御留守居今日御呼出ニ而為蒙　仰候事

（⑤安政四年二月十五日条）

殿席とは諸大名が江戸城に登城した際に控える部屋のことで、家格により部屋が異なり大廊下上之部屋の御三家が最上位で、島津家は元来大広間であった。島津重豪の娘寔子が一一代将軍の御台所になったことにより天明四年（一七八四）、重豪の江戸城のおける殿席は大広間から大廊下下之部屋に昇格した。天明六年斉宣は世子の立場で同様の待遇を受け、文化六年に家督を継いだ斉興もまたしかりである。しかし、嘉永四年に家督を継いだ斉彬の殿席は元の大広間に戻った。斉彬の待遇が三人と同等になるのは、篤姫が御台所となったことに因る。

二月二十日　斉興が正月二十八日に国許を発駕したと飛脚が到来する。二月晦日、市左衛門は麻布市兵衛町の南部信順、霞ヶ関の黒田斉溥へ使いに出る。三月三日上巳の登城、このとき斉彬ははじめて大廊下下之部屋に入ったであろう。

三月十日、斉彬は増上寺の広大院（寔子）御霊屋へ参詣、その後将監橋戸田邸の親姫（重豪娘・美濃大垣藩主戸田氏正室）住居へ、夕方には霞ヶ関の黒田邸に入り、五ツ半時後に帰殿。翌十一日には一橋邸へ、おそらくは慶喜と面会したのであろう。

十三日、斉彬は国許への暇を給わり、上使として老中久世大和守広周が薩摩藩邸を訪れ斉彬が出迎える。

十二日には、随真院・聡徳院が、十四日には勝姫（斉興娘）・智鏡院（斉興娘・土佐藩山内豊熙室）・晴雲院が、十七日には親姫・真華院（重豪娘・大和郡山藩柳沢保興室）・松平時之助（柳沢保申）が渋谷大奥を訪れる。

十八日隠居斉興が高輪へ光着。翌日斉彬は英姫とともに斉興に挨拶するため高輪邸を訪れる。二十日には江戸発駕前に島津家の江戸の菩提寺大円寺を訪れ御霊屋を参詣した。

発駕前に様々な大名が訪ねてくる。二十二日には松平上総介（広島藩世子浅野慶熾）、松平左兵衛督、内藤駿河守（高遠藩内藤頼寧）、高木主水正（河内丹南藩高木正坦）、青山主水（旗本）、二十四日には竹腰兵部少輔（尾張藩付家老竹腰正富）、松平相模守（鳥取藩池田慶徳）、伊達遠江守（宇和島藩伊達宗城）、鍋島内匠（旗本・鍋島直孝、佐賀藩鍋島斉直五男）。池田慶徳は一橋慶喜の実兄にあたる。参勤交代で国許に行く前に、他家に輿入れした一族の女性たちが別れを惜しみ見送りに訪れる例は、他藩でも見られる。しかし、このように多くの大名らが下国前に訪れるのは常の行動なのか、家定の継嗣問題など政局がらみなのかは判然としないが、二十四日の訪問者からは後者の可能性が感じ取れる。二十七日斉彬は再び一橋邸を訪れ暇乞いをする。

四月二日斉彬は老中五所へ廻勤、阿部正弘には直接会う。三日斉彬発駕、百幸衛・左金太も御供して鹿児島へ向かう。

安政二年七月二十一日に死去した真如院の三回忌の法要を、市左衛門は百幸衛とともに盛大に行なう。先ず、七月十二日大円寺の真如院廟前に石燈籠一対を備える。霊前に供える線香、水菓子、西瓜なども用意する。さらに饅頭三〇〇個を風月堂に注文し、高輪大奥の嶋山はじめ役女中三人、高輪屋敷内の西村仁平・大橋金十郎ら、細川家内伊藤ゑん・浦野、別の日には小の島、赤坂森山家、田町三丁目藤山たみ、同四丁目大坂屋、四谷塩町二丁目河口秀栄妻さな、小田原町鯉屋庄五郎娘うら、桜田屋敷内村岡一郎次など、実に多彩な人々に配っている。さなとうらは元奥女中である。市左衛門が斉宣付であったとき、斉宣からの島津家の内願を大奥へ伝える仕事をしたのが赤坂の森山家で、市左衛門は斉宣の意を受けて動き、森山家との橋渡し役を担った。

二十一日は真如院三回忌の法要で、渋谷大奥から御年寄岡村・表使田川、高輪より浜江、新御殿より梅岡、随真院・聡徳院兼帯浦崎、晴雲院付亀尾、寵姫付岩岡、伊集院かよ・富田こと・村岡きち・川井かち、野村後室、元真如院付人さよ・うら・そのなど多くの女性たちが参列した。

（2）活発に動く女性たち

市左衛門の日記には前節で見たように実に多くの女性が登場するが、すべてを比定するには検証にかなりの時間を要するので、ここでは長女ふみ、浪江、浪江の主聡徳院を中心に見ていきたい。

安政四年正月十三日、鹿児島から戻った父市左衛門をふみ・とめ・浪江の三姉妹は途中まで出迎える。聡徳院付奥女中として奉公していた浪江は暇をとっての出迎えである。休暇中の十七日浪江は徳寿院の初七日で島津家の菩提寺大円寺へ墓参に行く。二十日に八日間の長い休みを終えた浪江は船橋屋の菓子を手土産に駕籠で麻布龍土の屋敷へ戻った。江戸城大奥へ奉公に出たさかはこの年（安政四年）一度も宿下りをしていないが、浪江はその後も川崎大師参詣のため宿下りしている。江戸城大奥には厳しい規則があるが、大名家の奥向はそれほどでもなかったといえる。しかも浪江がつかえている聡徳院は、市左衛門がかつて御用掛を勤めており、聡徳院は市左衛門をしばしば屋敷に呼びつけるなど仙波家と親しい関係にあった。さらに阿部家の麻布龍土屋敷と島津家の渋谷屋敷は近い距離にある。二月二日、市左衛門は江戸出府の挨拶と浪江宿下りの御礼を兼ね聡徳院へ御機嫌伺いに罷り出る。

ふみが仙波家を訪れる記事は枚挙に暇が無いのでここでは割愛したい。ふみは奉公をしていないが、島津家の大奥やその縁者の奥向、妹たちの勤め先に顔を出し、彼女自身の人脈を構築している。

二月二十七日ふみは昼後に高輪大奥、ついで隣の有馬家中屋敷の晴雲院を訪ねている。三月十二日には斉興付の高輪大奥女中を出迎え品川の釜屋まで行っている。この釜屋は慶応四年に幾島が西郷隆盛との対談のあと利用した宿で島津家の定宿であることがわかる。六月十二日には高輪大奥にさえという特定の人物を尋ね一泊している。三月二十日には宿下してきた新せんの娘りくを誘い芝居見物へ行く。

四月十二日、市左衛門妻とふみ、つまり母と娘は一緒に江戸城のさか方を訪れ部屋向や詰所を見物し、三泊する。市左衛門は十五日江戸城へ二人を迎えに家来と下人・下女を遣わす。二人はまっすぐ帰らず大丸屋へ買い物に廻る。さて市左衛門も家族や仲間との芝居見物、舟遊びなど江戸市中で余暇を楽しんでいるが今回は割愛したい。

四月十八日ふみは娘いさを実家の仙波家に預けて麻布龍土の浪江方へ参り泊まる。

おふみ事おいさ同伴ニ而昼時分参り八時後ゟおいさハ此方へ残し候而龍土浪江方へ参り今晩は波方へ止宿いたし申候、麻布ニ而ハ七時後より被召出御庭へ御供いたし、夜分も　御目通りニ而御膳被下ニ而、四時分部屋へ罷下候由　（⑤安政四年四月十八日条）

十九日龍土屋敷を後にしたふみは森山家へ向かう。ふみが浪江の所へ行き麻布龍土に泊まることはその後も何度かある。

五月十八日浪江はふみと川崎大師へ参詣に行くため宿下りをする。翌日二人はもう一人の女性と家来を御供に川崎大師へ参詣し夜にもどる。

二月二日に江戸出府の挨拶で麻布龍土の聡徳院を訪ねた市左衛門は、三月十七日・四月六日も聡徳院の元へ、その後もしばしば訪れている。三月十七日は麻布市兵衛町の南部信順へ御礼に行ったあと、平服にわざわざ着替えて訪れている。それだけ聡徳院に対しては気楽であったといえる。また、訪問するだけでなく文のやり取りもしている。四月九日は内々に申上げることがあるとして文を聡徳院付老女菊野へ回しており、暑中の進上物は聡徳院だけでなく、菊野へも配っており娘の上司に気を遣っている。

市左衛門は聡徳院に「用があるので来い」と言われて訪れることもある。五月は内藤駿河守頼寧へ進上の朱粉の件で何回か訪れやりとりをする。内藤頼寧は若年寄で島津斉彬・松平慶永と交際があり、その娘五百は阿部正備の正室となっている。白河藩阿部家は聡徳院の夫正篤の死後、正瞭—正備—正定—正耆—正外—正静と幕末まで目まぐるしく藩主が替

り、正静の時に陸奥棚倉へ減封の上、所替となる。菊野との朱粉の金銭のやり取りの仲介をふみがしているのも興味深い。内藤頼寧への進上が斉興の官位昇進工作の一環かは判断が難しい。

白河藩阿部家は福山藩阿部家の分家で、福山藩の当主は辰ノ口に住まう老中阿部正弘である。閏五月は聡徳院の辰ノ口訪問や正弘所望の品を献上する件で呼ばれる。このことから聡徳院が斉興の官位昇進のために動いていたと見る事もできる。

しかし、六月十七日暁阿部正弘は死去してしまう。二十日にこの件で聡徳院付御年寄に面会し内談した市左衛門は、これ以降辰ノ口に対するお悔やみの件でしばしば聡徳院の元を訪れる。八月三日は聡徳院から阿部正弘への手向の詠歌などを見せられる。九月九日はお備えの蓮の造花などを拝見する。

九月二十九日聡徳院に呼ばれて行くと、国許（鹿児島）福昌寺の大慈院（島津斉宣）廟前へ献備の燈篭についてのことで、承知したと答える。十月には斉宣の十七回忌の法要が行なわれた。

十二月七日、市左衛門は浪江より来るよう連絡を受け参ると、菊野が体調不良であったため藤野へ面会し聡徳院の御前へ罷り出る。そこで聡徳院より白河藩の所替の内願のことを相談され、さらに斉興の官位昇進の件・金杉戸田家の嶋浦一件・伊集院ら役替えのことなど島津家内部のことも直接話す。

龍土ゟ御用之義有候、孫九夕刻ゟ罷出候様被仰付候段、浪江ゟ申来ニ付、暮前より寒中御機嫌うかゝひ兼罷出、菊野不快故藤野へ面会、案内ニ而御前へ罷出候處、恒例御酒御吸もの其外　下され候上、白川表御所替之御内願ニ付、御国許へ被進候御直書幷堅山山田等之御副書等便宜次第出呉候様述被遊候御渡、且　宰相様御心願御一条幷金杉島浦之一件、伊集院為十郎殿富田覚太郎殿御役替候事、御直話承知いたし四半時分帰宅いたし候事（⑤安政四年十二月七日条）

分限帳が確認できないため断定的なことはいえないが、市左衛門が出府した際、手土産を渡した聡徳院付女中は菊野、藤野、福井、みを・さよ・かね・きん、とせ、仲居、御末三人で、浪江と彼女らは島津家より遣わされた女中と勘案できる。聡徳院は嫁しても島津宗家の一員として手助けをすると共に発言もし、実家の状況を把握しようとしている。一方で大藩であり御台所にも縁がある実家島津家を、婚家阿部家の内願成就に利用することもしている。

（3）大奥向の調整と小の島

市左衛門が安政四年に行なった職務として、上屋敷御殿建替用掛、翌年の琉球人参府御用取扱、大奥向の調整、斉興の官位昇進に関する運動などを挙げることができる。

島津家は幕府より幸橋御門外の桜田屋敷を上屋敷として拝領する。しかし、桜田屋敷が手狭であり中屋敷であった芝屋敷周辺の土地も屋敷地として入手し、芝は藩主居屋敷として政庁も置かれた。安永二年（一七七三）に藩内においては芝を上屋敷と唱え、翌三年幕府に対しては桜田を上屋敷、芝を居屋敷と唱えるよう触れられた[7]。市左衛門が命じられた上屋敷御殿建て替えとは、安政大地震で破損した芝屋敷御殿向の建て替えのことである。奥向の機能が渋谷から芝に戻るのは翌年十一月頃である。

島津家江戸藩邸の大奥向を取り仕切っていたのが、斉彬の信任が厚かった御年寄小の島である。市左衛門が大奥へ入る時は広敷用人に呼ばれる時と、小の島より直接連絡が来る時があり、大奥の御年寄詰所で内談する。

四月十三日、御年寄詰所へ通った市左衛門は、昨日姫様方より肴を頂いた礼を先ずいい、寵姫への金五〇両年々拝借の件について内談した。この年市左衛門が小の島と内談した大きな案件はこの寵姫へ金五〇両を

遣わす件と篤姫への進金五〇〇両、戸田家の親姫付女中一件、戸塚静甫一件が挙げられる。今回は長くなるので奥医師戸塚静海の一族戸塚静甫の件は次の機会に譲りたい。

島津家では他家に嫁いだ娘たちに手当金を盆暮れに渡しているが、金額は同一ではなく、重豪・斉宣・斉興の娘たち全員が対象となっているわけでもない。寵姫方より五〇両援助の申し込みがあったので検討することとなった。四月十六日小の島と御年寄詰所で面会し、寵姫へ金五〇両の件を高輪大奥嶋山とも相談することとする。五月九日再び小の島と内談し、大坂の斉彬に相談すること、来年は英姫が登城するためいろいろと品物を整えなければならないことなどを話す。状況は難しそうに見えたが、閏五月二日に寵姫へ年々五〇両ずつ進金することとなり、七月八日に盆分として最初の支給がなされた。

御前様へ被進金百両　随真院様へ同断五拾両、智鏡院様へ同断百五拾両〆三百両御執□方ゟ八時後相廻候（中略）尤　寵姫様へ同断之五拾両ハ今朝相廻来候事　（⑤安政四年七月八日条）

これは婚家が実家より格下で、経済的にも苦しいことを考慮して、娘たちにいわば小遣いとして与えているものであるが、斉彬は篤姫にも進金を行なった。

八月五日の条に篤姫へ金を献上することについて斉彬よりアクションがあったことを記す。十月二十二日、市左衛門は御台所献上金について、大奥へ通り小の島へ用談する。

御国許より去ル七月廿六日申来御□□向旁　御台様へ当暮ゟ此程年々被進金之事廿二日小の島へ談置候通五百両御献上ニ取究、今日大奥江持参いたし小の島へ相渡申候事　（⑤安政四年十一月二日条）

今年安政四年の暮れより毎年篤姫へ五百両献上することが決まり、十一月二日市左衛門は金を大奥へ持参して小の島に渡した。献上は大奥向よりなされることがわかる。この献上は斉彬から忠義への代替りで中断し、安政六年十月の本丸火災により、その暮は物入りという理由で行なわれたが、その後継続された可能性は低い。

小の島も市左衛門を信頼していたのだろう五月十二日に市左衛門を大奥へ呼び、斉興が体調を崩していることを内々に告げる。十九日には斉興病気平癒の祈祷を宝泉寺へ頼むことなどを小の島より承る。二十日は宝泉寺へ祈祷料を納めに代参する。二十四日から開始された宝泉寺での祈祷の効果があったかはわからないが、三十日斉興の体調が回復する。

五月二十三日、安政大震災で大破していた将監橋の親姫住居の普請が成就した祝いに、普請担当の者と共に市左衛門も呼ばれた。金杉より戸田氏正も訪れた。市左衛門は親姫付用人中山武兵衛の案内で奥へ通り、御年寄嶋浦に面会、御目見を許され、酒や御膳などを頂く。

十月十四日、品川五郎兵衛が市左衛門のところに来て次のように話した。八月に起きた芝金杉親姫住居で金子が紛失した一件を調べていたところ、台子之間のさというものが盗み取り、御年寄嶋浦も荷担したとなった。二人を雇い続けることはできないので暇を命じるところである。しかし御年寄に暇を出すというのは容易なことではないし、斉彬の留守中でもある。そこで、市左衛門は品川を同道して渋谷大奥へ行き御年寄詰所で小の島以下三人の御年寄に事情を話し協議することとなった。この日の深夜零時頃恐らくは小の島に呼ばれたのであろうが、嶋浦が渋谷大奥に入った。

ここで注意を喚起しておかねばならないが、聡徳院の例でも説明したように、嶋浦はじめ親姫付女中は島津家が雇った者たちである。従ってその処分は戸田家ではなく島津家が行なうこととなる。

十月十八日高輪御殿の嶋山を呼び、嶋浦も参加し、小の島以下三人の御年寄と市左衛門・品川五郎兵衛の計七人で長談義をし、十月二十四日には親姫付女中すべての名前・宿許を確認する。十二月二十三日にもまだ結論は出ておらず、高輪御殿つまり斉興付老女にも小の島は相談をし

ている。斉彬不在ということもあるが斉興の奥向への発言力を感じ取れる。もっとも小の島も斉興時代からの御年寄で、そのときの順位は嶋山に次いで二番目であった。処分の記事がないことから、年内にこの一件は落着しなかったようだ。

（4）斉興の三位昇進

安政四年正月時点の斉興の官位は正四位上参議（宰相）で日記には、「宰相様」「高輪様」と記載される。島津宗家の極位極官以上に達していたが、重豪が三位になった前例より斉興は三位を望み、斉彬もその希望を叶えようとしていた。安政四年の市左衛門の最大の任務はこの画策であった。

二月七日、市左衛門は発駕前の斉彬に大奥へ呼ばれ、斉興心願の件について家老島津豊後久宝の指示を受けて動くようにと告げられた。勿論この工作に動いた家臣は市左衛門だけでなく、岩元太右衛門や永江休之丞などの名前がみられるが、市左衛門は阿部正弘について堀田正睦と幕閣の中心人物への工作を担っており、重要なポジションにいたことがわかる。

宰相様御心願御一条右御登城後御右筆大迫藤次郎殿へ御願書認方申渡出来之上□御留守居半田嘉藤次殿へ相渡、夕刻阿部伊勢守様へ持参候事　（⑤安政四年三月十五日条）

三月十五日、望日の登城より戻った斉彬は右筆に指示して願書を認めさせ、留守居に老中阿部正弘の許へ届けさせた。当時の幕閣で決定権を持っており、斉彬とも親しい間柄にあった阿部正弘が主な交渉相手であった。三月十八日斉興高輪へ着、四月三日斉彬江戸発駕。

四月十日、市左衛門は明日辰ノ口の阿部邸へ内使に行くにあたり、手土産に持っていく唐焼茶碗・毛氈・源氏煙草を用意する。翌日辰ノ口阿部邸の表門より勝手へ通り側向の藤田与兵衛へ面会し、斉彬の口上を告げる。

五月三日も阿部邸へ行き裏門より勝手へ通り藤田与兵衛へ面会し、唐焼花入・花台・肴代を差上げる。十一日も同様藤田へ面会。

六月七日には阿部正弘病気の知らせが入り、何か見舞いの品をと思い食べ物は控えているので鉢植えが宜しいと藤田からの知らせを高輪に回す。六月八日には岩元太右衛門が阿部伊勢守正弘・久世大和守広周・牧野備前守忠雅・堀田備中守正睦へ暑中見舞いの内使に赴く。

市左衛門は六月十九日条に阿部正弘が十七日暁に亡くなったことを記す。二十三日には辰ノ口阿部邸に参り、藤田与兵衛に面会してお悔やみを述べる。

その後は切り替えも早く斉興心願一条について、老中首座堀田正睦に内使に行くよう七月十一日に市左衛門は指示される。しかし、十二日夜に堀田より「書面願之通ニハ難相整候やとも」と仰せがきたので、十三日に内談して堀田へ内使者を勤めるよういわれる。十八日斉興心願につき堀田正睦へ内使者、駕籠にて坂下堀田邸へ行き勝手より通り側用人熊谷左膳へ面会する。

七月二十五日堀田正睦に品物を進上したが返却されたので、八月二十五日は表向より贈るとまた迷惑かもしれないと考え、万年根付時計と肴料二〇〇〇疋を戸塚静海より渡してもらうことにした。二十六日昨夜品物は戸塚が持参したが、市左衛門も内使に伺う。堀田正睦に替り交渉が苦戦している様子が窺える。戸塚静海は安政五年家定の病状が重くなると篤姫に請われて幕府の奥医師となるが、この時はまだ薩摩藩の医師である。医師が内願交渉に関わるのはよくある事例である。

九月二十六日、市左衛門は先ず八月に老中になったばかりの辰ノ口脇坂安宅邸へ行き側用人根来右兵衛に面会し、歓びの口上を述べ鮮鯛を贈り直書を渡す。さらにその日はそれから坂下の堀田邸へ行き熊谷左膳に面会し斉興心願の進捗状況を尋ねる。しかし、今日は縁組が済み混雑しているので「追而」といわれ、いつもタイミングが悪い。

十一月十日御側御用取次平岡丹波守道弘へいまだ表向より頼みにいっていなかったので挨拶に行き、その後馬で高輪御殿に行き永江休之丞に面会し相談する。十三日、斉興心願について久世広周へ岩元太右衛門が内使に行き贈物を届ける。十四日、市左衛門は堀田邸に罷り越し熊谷左膳に面会し、押打根付時計・小鳥嶋香箱・コウクルの三点を国許鹿児島より送られてきた品と説明する。退城前で帰宅していないといわれたがなんとか頼み置き、その後小川町の平岡道弘邸へ行き今江久左衛門に会う。十五日、九月十三日に老中に再任した松平忠固の元へ岩元太右衛門が内使に行く。また十六日は斉興の心願のため、斉彬は御台所篤姫にも品物を献上することとする。

十九日には家老島津久宝、二十日には斉興付の永江休之丞と用談して作戦を練る。二十九日には斉興心願が成就した際の入用金を大坂表の浜村孫兵衛に頼むことが記されており、事態が好転したと思われるが、詳細は記されていない。

十二月十四日、市左衛門は内願の模様が良いので帰らずに待っていると、暮六時頃に明十五日斉興の御用で登城するよう老中連名の奉書が届く。すぐにそれを右筆が高輪へ届ける。佐土原藩主島津忠寛が名代を勤めることとなっていたので頼みを出す。それより大奥御年寄詰所へ向かい、英姫や姫君たちの耳にも入れ、明日高輪へ進上する悦びの品の相談を小の島とする。その後仕度を替え馬で高輪へ行く。ここで市左衛門は斉興の位階昇進に関わる御用掛に任じられる。

御側役
仙波市左衛門

右者此節
宰相様御位階御昇進被仰出候者
御用掛被　仰付候条可申渡候
十二月豊後

（⑤安政四年十二月十四日条）

この日市左衛門が帰宅したのは夜中の十一時ころであった。

十五日、市左衛門は熨斗目麻裃着用で昼ごろに馬で高輪へ行き御用部屋に詰めて待っていた。

宰相様御事昨日御奉書御到来ニ而御用召ニ候得共、御不快之筋を以島津淡路守殿御名代として　御登城被成候處、左之通り従三位被為蒙仰候段（中略）、淡路守殿ニハ御退場ゟ直ニ御老中様方御廻勤済ニ而、八時分高輪表ゟ御参殿、於御休息所　宰相様右被遊御承知、畢而淡路守殿ニハ御控席へ御退座ニ而御料理等上り七時後同前ゟ御立右通り淡路守御退座之上、同断御休息所ニおいて豊後殿筑後殿出雲殿　御目見引続き三原藤五郎殿早川　五郎兵衛殿拙者一列同断御目見被仰付畢而大奥之様御引入

御礼済　薩摩守父
松平大隅守
名代島津淡路守
思召を以従三位被　仰付候（後略）

（⑤安政四年十二月十五日条）

斉興の名代として登城した島津忠寛は、退城後に老中邸を廻勤し、高輪御殿に入り、休息所で斉興に対面、控席で料理の饗応を受ける。その後、家老・留守居らにまじり市左衛門も休息所で斉興に拝謁する。一段落後、大奥百花亭で市左衛門ら工作に動いた藩士・広敷用人・奥医師等に酒・肴・菓子が下され、そこに斉興・勝姫も顔を出す。

十八日、阿部家家臣藤田与兵衛が市左衛門宅を訪れ、斉興昇進祝として鮮鯛一折を届けてくれた。十九日は心願成就で自分へのご褒美ということか仲間と小桜という料理屋で酒を飲む。二十日は高輪より極内々に金二〇〇両を頂戴する。二十三日心願成就の挨拶に堀田邸へ行き熊谷に面会する。二十八日、市左衛門は馬で高輪御殿へ行き、客間で紋服と銀三十枚を昇進の労として斉興手元金より拝領する。この時、島津久宝、

半田嘉藤次・早川五郎兵衛・永江休之丞も拝領する。三十日にも同様の理由で紗綾二巻を拝領する。安政五年三月五日、前記の功により市左衛門は側用人に昇進する。

重豪の三位昇進[8]では何年もかけ、表向・中奥向・大奥向ルートを駆使して、ようやく成就にこぎ着けている。しかし、今回は篤姫が入輿して間もないことから大奥ルートが機能している様子は見受けられず、また重豪の先例もあるということか、比較的すんなりと成就したように見受けられる。

市左衛門は斉宣の側近時代に、斉宣とその姉であり十一代将軍家斉の御台所寔子との内願交渉に携わった経験がある[9]。それを買われ今回も重要な役割を任されたのではないだろうか。

おわりに

稲生家文書（埼玉県立文書館蔵）「（天璋院付女中分限帳）」および井伊家文書（彦根城博物館蔵）「天璋院様附女中分限帳」では、さかの宿許と記される仙波市左衛門（松平薩摩守家来）の続柄が何故か兄となっている。しかし、当文書より父であることは明白である。分限帳は原本を書写したものであることから、書写段階で誤写した（或いは意図的に兄とした）と推察できる。ここで改めて父としたい。

市左衛門は風呂を焚いて入湯したことをまめに記入しているので「今日居風呂焚入湯いたし候事」、江戸の人が何日おきに風呂に入っているかがわかる。安政四年は正月二十九日・二月五日・十二日・二十四日と続き、その後四月二日に飛ぶことから必ず記載していたとはいえないが、かなり間隔があいていることがわかる。

道中記に関しては今回詳細に検証しなったが、昼食を中食と呼び、東海道は街道が整備されている為か、きちんと中食を取っているが、福岡から薩摩までは中食を抜いたり、弁当であること多いなど興味深い事例が見られた。

今回は本史料の内容を読み解くことを主眼としたが、他の史料よりの論証の補完や、本史料の翻刻などは今後の課題としたい。

1 「御祭祀提要」（『尚古集成館紀要　第五号』一九九二年）、『島津氏正統系図』
2 森山りさ「風のしるへ」（森山家文書、国文学研究資料館マイクロフィルム）
3 崎山健文「史料紹介「嘉永六年　表方御右筆間日記」」（一・二）（『黎明館調査研究報告 第二十三・四集』二〇一〇、一一年）
4 崎山健文「史料紹介「嘉永六年　表方御右筆間日記」（一）～篤姫養女一件寸考」（『黎明館調査研究報告 第二十三集』二〇一〇年）
5 『徳川将軍家の婚礼』徳川記念財団、二〇一七年
6 保科順子『花葵　徳川邸おもいで話』毎日新聞社、一九九八年
7 『鹿児島県史料　旧記雑録追録』第六、鹿児島県、一九七六年
8 崎山健文「島津重豪三位昇進にみる島津斉宣と御台所茂姫」（『島津重豪と薩摩の学問・文化』アジア遊学、勉誠出版、二〇一五年）
9 畑尚子『島津家の内願と大奥―「風のしるへ」翻刻』同成社、二〇一八年

執筆にあたり崎山健文氏に薩摩藩に関する地名や人名、江戸屋敷について、ご教授いただいた。厚くお礼申し上げる。